

## 運慶にであう

山 本 勉

山本勉氏 略歴

一九五三年横浜市生まれ。東京芸術大学大学院博士後期課程中退。東京国立博物館勤務を経て、現在清泉女子大学文学部教授。東京国立博物館名誉館員。文化庁文化審議会文化財分科会第一専門調査会委員。主な著書『日本彫刻史基礎資料集成』鎌倉時代造像銘記篇（共編著、中央公論美術出版、二〇〇三年）、『普賢菩薩像』（至文堂、一九九二年）、『大日如来像』（同、一九九七年）、『南北朝時代の彫刻』（同、二〇〇七年）、『仏像のひみつ』（朝日出版社、二〇〇六年）、『続仏像のひみつ』（同、二〇〇八年）、『運慶にであう』（小学館、二〇〇八年）、『東国の鎌倉時代彫刻』（きょうせい、二〇一一年）など。

### 運慶の概要

1 運慶にであう

まず運慶の生涯を大ざっぱにたどってみます【図1】。平安時代の終わり、一一七三年に長男の湛慶たみけが生まれています。これからみる最初の作品がその三年後です。これも平安時代の終わりですね。どちらも二〇代のことと仮定します。長男が生まれるのが遅い人も、生まれない人もいます。長男が生まれるのが二〇代で生まれて、その頃

に最初の仕事をしたというイメージです。そうになると、運慶の誕生は一一五〇年頃と考えることができます。有名な南都焼打ち、南都が焼かれて、興福寺・東大寺が灰燼に帰した、それも二〇代の頃ということになります。それから運慶は貞応二年（一二二三）の暮れに亡くなったことがわかっています。一一五〇年に生まれたとすると、亡くなったのは七〇代前半ぐらいでしょうか。

## 運慶の生涯

西暦	和暦	事項	年齢
1150年頃		誕生	1
1173	承安3	長男湛慶生まれる	20代?
1176	安元2	円成寺大日如来像	20代?
1180	治承4	(南都焼き討ち)	20代?
1223	貞応2	12.11 没する	70代?

図1

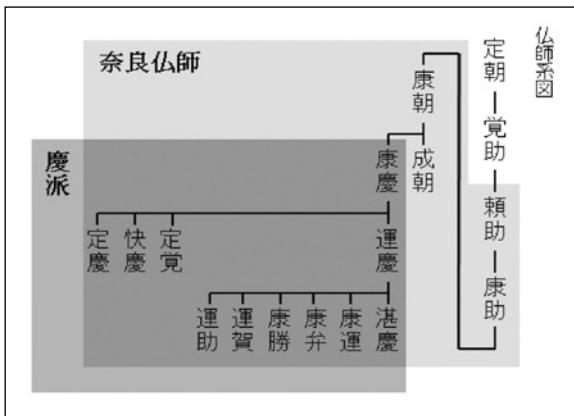


図2

それから運慶の系統ですが、系図がある程度わかっています【図2】。系図の初めの定朝は京都の宇治の平等院鳳凰堂の本尊阿弥陀如来像の作者で、日本的な彫刻の表現、和様を作りあげたことで有名な人です。この定朝の直系で何代か後に頼助という人がいますが、この辺りから奈良下り、藤原氏の氏寺である興福寺にかかわる仕事を専属して担当する仏師になります。これが奈良仏師です。こ

の系統に運慶も属するわけですが、頼助の二代あとに康朝という人がいます。この康朝の息子が成朝です。この成朝との関係、あるいは康朝との関係ははっきりわかりませんが、康朝という人がいます。普通に考えれば、康朝の弟子でしょう。この康慶の息子が運慶です。ですから、定朝以来の直系ではないわけですね。この頃、奈良仏師の直系は定朝の「朝」の字を名乗っております。ところが、直系ではないこの康慶という人、運慶のお父さんがたいへん力を持って、鎌倉初めの南都復興に大活躍するのですが、その康慶の「慶」字にちなんで、このグループを慶派と呼んでいます。慶派は奈良仏師のように書いてある本がありますが、それは誤りです。運慶の同僚として有名な快慶の「慶」の字ももちろんこの康慶の「慶」字をとったものでしょう。

ところが、おそらくこの系統では、ある段階から「康」字が一番意味のある文字になるのです。ですから運慶の子どもも、この「康」字を名乗っている方が、むしろ多いようです。別にこの慶派というのは、鎌倉時代から彼ら自身が「おれたちは慶派

西暦	和暦	作品	数
1176	安元2	●円成寺大日如来像	1
1186	文治2	■興福寺仏頭・仏手・化仏	1
1186	文治2	●願成就院阿弥陀如来・不動明王二童子・毘沙門天像	5
1189	文治5	●浄楽寺阿弥陀三尊・不動明王・毘沙門天像	5
1193	建久4	□真如苑大日如来像	1
1197	建久8	□金剛峯寺八大童子像	6
1199	建久10	□光得寺大日如来像	1

図3

西暦	和暦	作品	数
1201	正治3	□滝山寺聖観音・梵天・帝釈天像	3
1203	建仁3	●東大寺南大門金剛力士像(二王像)	2
1206	建永1	□東大寺俊乗上人像(重源像)	1
1212	建暦2	●興福寺北円堂弥勒仏・無著・世親像	3
1216	建保4	●光明院大威徳明王像	1
?	?	□六波羅蜜寺地藏菩薩像	1
確定作品・推定作品合計			31

13件

図4

だ」といつていたわけではなくて、いまわたしたちが勝手に呼んでいるだけであるというのは、どこかで覚えておいてもよいかもしれません。

### 運慶の作品

運慶は日本の中世以前からの芸術家としては、作品がわりあいたくさんあるといつてよいと思います。一覧してみま

しょう【図3・4】。いろんな記号をつけておりますが、●は、仏像に銘文があつて、あるいは仏像の中にはいつている品物に文字が書いてあつて、運慶の作品であることがわかるものです。それから■は作品と同時代の文献に、やはり運慶の名前があつて、確かめられるものです。それから□は、現在の研究によつて運慶作品であることがある程度確かめられているものです。

ですから、運慶の作品とかなんにいつておりますが、確定の度合いは多少違います。ともあれ、これらを合計しますと、三十一体あります。ただ、一件の仏像で何体かあるものもありますから、件数で申しますと、十三件ということになります。この十三件三十一体を、一応わたしは運慶作品であると認識しております。

それでこの中で、●と■、すなわち運慶作品であることが確定しているものは七件十八体になります。これが確か

な運慶作品ということになります。その「確かさ」にも度合いがあるでしょう。わたしたちが勉強している美術史というのは、美術作品の形、状態、それも判断にふくめるわけですが、いわゆる歴史学、文献史学のほうは、文字で書いてないとな納得しないのですね。それでわたしたち美術史の人間と、文献史学の先生との間では、ときどきくいちがいが起こります。ここに挙げたものはおそらく、文献史学の先生にも、まあこれならしょうがないと認めてもらえるであろう運慶作品です。それが七件になります。

このところわたしは、運慶関係の本をいろいろ出しておりますが、きょうのお話のタイトルと同じ『運慶にであう』という本があります。これにはまさに、三一体のわたしが運慶と考える作品を紹介しています。ただ、この本では、作品の年代順に紹介しておりますから、きょうのお話とは若干構成が変わつてまいります。それから『週刊朝日百科 国宝の美』という週刊誌形式のシリーズでも、運慶の一冊を出しております（二七号『運慶と康慶』、二〇一〇年）。それから、去年の秋『別冊太陽』という一冊をわたしの監修で出しました（二〇一〇年、平凡社）。これは中身は、わたしよりもだいたい若い研究者に書いてもらったところが多いのですが、運慶研究の現在の水準を示した本

になったと自負しています。

運慶は後でお話するように、いまでいう関東地方、昔でいう東国でも活動しています。その運慶を中心に、東国に残っている鎌倉時代の彫刻をまとめた本も、今年のお正月に出しております（『東国の鎌倉時代彫刻―鎌倉とその周辺―』（『日本の美術』五三七））。

### 明治の運慶

ここから話の本題になります。これから、わたしたちが運慶とどう出会ってきたか、その中で特にわたし個人がどう出会ってきたか、そんな流れになるかと思っています。

近代の初め、明治時代に、ある程度わかっていた、確かな運慶作品とは三件に過ぎません。一番初めは、京都の東寺の南大門の金剛力士です。自分は運慶には詳しいけどそんなもの知らないぞという方もいらつしやるかもしれません。それもそのはずでありまして、これは明治元年（一八六八）に、不幸にも焼けてしまつております。もしかしたら、どこかに写真がないものかとも思うのですが、わたしは残念ながらまだみていません。そして、江戸時代にさかのぼると、おそらく一番有名な運慶作品というのは、この東寺の二王だったようです。これが焼失したのは、たいへん残念です。いまでも東寺の南大門は小さな門がありま

すが、そこに二王はありません。二番目は東大寺南大門の二王です。奈良に行けば大抵の方が、南大門でこの二王像をご覧になると思います。東寺の二王がないいま、これが残っていることは、たいへんすばらしいことです。運慶といえは二王というイメージは、昔もいまもたいへん強いと思います。そして三番目が興福寺北円堂の、弥勒仏・無著・世親像です。特に、両脇にいる無著・世親はご存じの方が多いと思います。

明治の初めには、運慶作品といっても、確かなものはこれくらいだったのですね。ただもちろん、運慶の名前は有名で、作品とはつきり結びつかないまま、運慶の伝説がひとり歩きしている状況だったかと思えます。明治の文豪、夏目漱石が、『夢十夜』という作品に運慶のことを書いているのは、ご存じの方が多いでしょう。第六夜に出てくる、運慶が東京の護国寺の山門で二王を刻んでいるという評判だ、と始まる有名な文章です。漱石は明治の人で、明治四年にこれを発表して、明治四四年に亡くなりまして。ですから、漱石にとつての運慶というのは、やはり伝説の中での二王をつくる人というイメージだったのでしょう。これからお話しする、現在の美術史研究の中で明らかになってきた運慶の姿を、漱石は知らずに亡くなったのです。

### 運慶研究の始まり

運慶の研究が始まるのは大正十年（一九二一）のことです。いまからちょうど九十年前です。つまり、これだけ有名な運慶ですが、まだそのきちんとした研究は、始まって百年経っていないのです。わたしもけっこういい歳になりましたから、運慶がわかってからの九十年の、もう半分以上生きているのかと思うと、感慨深いものがあります。ともあれ大正十年に奈良の円成寺の大日如来像から運慶の名をふくむ銘文がみつかりました。これが運慶に関する近代的な研究の始まりです。この像は、今年のお正月から三月まで横浜の金沢文庫の展覧会にまいりましたので、この会場の中にも、ご覧になった方が多いのではないのでしょうか。

この像の台座の一番上の板の裏側から墨書銘が発見されたのです。銘の二か所に、運慶の文字が出てまいります。どういった内容かといいますと、運慶が安元元年（一七六）に仕事を請け負って仕事を始めた、その時にもらった料物、要するに仕事の代価としてもらった物を書いてあるのですね。真ん中の一行の初めは、「渡し奉る」と読むのですが、要するに、いまふうにいえば「納品した」、運慶がお寺に仏像を納めた、そう書いてあるわけです。

発見当初は、ここに大仏師康慶その弟子運慶と、康慶の名前が出てまいりますから、これは康慶・運慶の合作だと

いうふうにいわれた時期もありました。しかし、ここに花押という運慶の書き判、サインがあり、これは、この後みつけた運慶の文書にある花押とも一致します。ですから、この文字を誰が書いたのであれ、ここに運慶のサインがある以上、これは全体が運慶の立場で書かれたものです。つまり、これは作者が運慶であることを示しているとして理解されています。とにかく、この銘文が大正時代にみつかった、たいへんな騒ぎになったようです。

次は興福寺北円堂の諸像です。これは文献的な研究で運慶の作であろうということがわかっていたわけですが、これが昭和九年（一九三四）に解体修理が行われ、中尊弥勒仏像の台座の下の方の裏側から銘文がみつかりました。ここに運慶の名前はなかったのですが、運慶の子どもたちや弟子の名前がみつかりました。そして文献にあるように、これらが運慶を中心に造られた仏像であるということもわかりました。それから像内納入品と申しまして、仏像の中には多くの場合、品物がいっているのですが、その品物もこのときに発見されています。

まず、銘文のほうですが、これによって各像の担当者がわかりました。中尊の弥勒仏像は源慶・静慶（「せいけい」あるいは「じょうけい」と読むのでしょうか）、これは運慶の昔からいる弟子の名前です。それから脇侍の一体は

運覚という人、もう一体分の名前がどうしても読めません。それからお堂の四隅にいる四天王、これを運慶の長男湛慶、次男康運、三男康弁、四男康勝。要するに四天王を東南西北の順に、長男・次男・三男・四男が担当しているのです。それから無著・世親像を五男の運賀、六男の運助、つまり六人兄弟の末っ子二人が担当していたのです。

『仏像のひみつ』にも書いたことですが、仏像にはいろいろ、えらくないがあります。如来、菩薩、それから天ですね。そして仏像ではない人間。仏師もおそらくえらい順番に担当したのでしょう。だからこの段階では、子どもたちよりも弟子のほうがえらいということになると思います。こんなことはまだ昭和の初めに研究が進んでいたわけではありませんが、現在はそこまでわかっています。

納入品は白黒の写真が残っているだけです。まず頭の中には、二枚の五輪塔の形をした板で挟んだ厨子と巻物、それから胸の位置にあるものは、これは蓮の花がついた水晶の玉、これは記録によりますと、蓮の花と柄が真っ赤な色で塗られているようです。柄の端は色がないようですから、おそらくこの部分を、背中の内側に差し込んで留めているのでしょう。これらは取り出されておりませんから、いまはみることができません。この仏像のいまの状態から考えますと、おそらくわたしの生きている間に、これをみ

ることは無理でしょう。この会場の中でこれをご覧になれる方は、ごくわずかであるという気がします。あるいは、いないかもしれませんね。頭の中の厨子は、開くと菩薩像と巻物がいっています。菩薩像は檀像だんぞうの、つまり白檀でつくった弥勒菩薩像です。そしてこれを納めるという願いを書いた巻物、願文がんぶんです。厨子の扉には弘法大師と鑑真和尚を描いています。その意味なども今後さらに研究すべきことかと思えます。

昭和の初めまでにこんなことがわかっておりましたが、それから長い間、運慶の発見はありませんでした。

### 東国の運慶

ところが、だいぶ経ちまして、戦後の一九五九年、もうわたしは生まれております。ちょうどいまの天皇陛下のご成婚の年ですが、わたしの家がテレビを買った年でもあります。この年に神奈川県横須賀市の浄楽寺じょうらくじの仏像から、運慶の名前が出てきます。その結果、浄楽寺に伝わっておりました阿弥陀如来及び両脇侍、かんとんにいえば阿弥陀三尊像、それから不動・毘沙門、これらが運慶作品で、文治五年（一一八九）に和田義盛という鎌倉幕府の武将の注文でできたものとわかり。たいへんな騒ぎになりました。

このとき毘沙門天像から銘札つまり銘文を書いた札が発

見されたのです。数年後には不動明王像からも同じ内容の銘札が出てまいりました。銘札は上のほうが丸く、下が幅広いの板です。これを月輪形がちりんの銘札といいます。月輪に書いてあるのは、バイイという毘沙門天のシンボルの文字ですね。では、この月輪とは何かという問題になりますが、これは仏教でいう心月輪しんがちりんというもので、かんとんにいえば仏像の魂です。平安の初めに密教を日本に伝えた弘法大師はこう説いています。仏像を人間が拜んでいます。仏像の中には魂、心月輪がある。それから、仏像を拜む人間の中には、葉があるというんですね。これが仏像の口から出て人間にはいる。人間の魂の中にある仏像を称える言葉は、人間の口から出て仏像の足元からはいつて、仏像の魂の上に並ぶ。これによって、仏像と仏像を拜む人間は一体化するということです。この密教の教え、これを具体化したのが心月輪です。

この板状の部分に、運慶の名前が出てまいりました。上のほうに文治五年三月二十日。それから下のほうに、「大願主平義盛芳縁小野氏」、これは幕府侍所別当の和田義盛とその妻の名前です。小野さんという一族から出た奥さんなのでしようね。一番下に、運慶と小仏師十人がこの仏像を造った旨が書いてあります。これによって、横須賀の浄

楽寺の仏像が運慶の作品であるとわかった。横須賀に運慶があるということ自体がたいへんな驚きでありましたけれども、運慶という人が、鎌倉の初めにたいへん奥行き深い、非常に丸々とした体の、太った仏像を造っていた、これも驚きの一つでありました。なかには、その当時の人の言葉をそのままいいますと、こんな下品なものは運慶ではないというふうにも思った研究者もいたようです。この当時、年輩の仏像の研究者は、皆反対しようです。何かがちがっているのだと思つたらしいのですね。

それはともかく、運慶は鎌倉幕府の記録では確かに運慶が活動したことが書いてあつたのですが、それがほんとうであつたことが問題になつてきたわけです。それで神奈川県からすれば、隣の静岡県現在の伊豆の国市、要するに伊豆の願成就院（だんじゅういん）というお寺に伝わっていた阿弥陀如来、不動明王・二童子、それから毘沙門天、これも運慶作品であるとやがて考えられるようになりました。ここには、すでに江戸時代に取り出されていた銘札があつて、そこには文治二年（一一八六）という年と、運慶の名前が書いてあつたのです。ところがそれは、信じられていなかったわけです。阿弥陀如来像は古く昔の国宝になつてはいるのですが、やはりこの像の都らしからぬ様子、要するに田舎びた感じ

は運慶ではありえないという理解が、戦前は一般的であつたようです。ましてや、銘札が出たという毘沙門天・不動明王は、その銘札のほうは信じられながら、像のほうは認められていなかった。銘札は、戦前に国宝になつていたのですが、仏像はなつていなかった、つまり別のものと思われていたのですね。それが、横須賀の浄楽寺の発見によつて、運慶であると認められるようになった。これはたいへん大きな問題です。

江戸時代に取り出された不動、あるいは毘沙門天の銘札は、浄楽寺像が月輪形であつたのに対して五輪塔（ごりんとう）の形をしています。ちょうどいま、お墓にお供えする卒塔婆（そとば）とだいたい同じ格好ですね。上の部分が五輪塔で、先ほどの月輪形の銘札と同じように、下の部分に銘文を書くための板状の部分を残しているわけです。裏側は何も書いてありませんで、ここに年代、年月日とそれから運慶はじめ、関係者の名前が出てまいります。両方だいたい同じ文字が書いてあります。ここに書いてあるのが、文治二年丙午五月三日これを始め奉るといふ、要するに文治二年に仏像を造り始めたということです。

仏像の銘文に年月日を書いてある場合、多くの場合、造り始めの日付が書いてあることが多いのですね。これはなぜかという、造り始めのときに、その材木、木材を清め



る儀式をするのですね。御衣木加持みそぎかじというのですが、これが仏像にとつてはだいじなのです。ですから、造り始めの日付を書くことが多いのです。注意しなければいけないのは、ある仏像の中に年月日を書いてあった場合、造り始めの日付なのですけども、しかし、その仏像の中が削りぬかれて銘文が書ける状態、あるいは品物が入られるときというの、それよりも数か月後なのですよね。つまり数か月経ってから、さかのぼった日付を書く。そのことはちょっと記憶に留めておいてもいいかもしれません。

いまでもわたしたちも年月日空欄にした書類を出すことがあります、昔からそういうことはあるわけです。つまり、ありうべき日付として、仏像の場合には、この例のように、造り始めた日付を書いたということですね。そして「巧師勾当運慶」、つまり運慶の名前と、「檀越」、これはスポンサーですね、スポンサーの「平朝臣時政」。これが北条時政、幕府の執権であり同時に、頼朝からすれば妻の北条政子のお父さん、舅ということになりますね。こういう銘文を書いた。これで確かに、運慶作品であるとわかるわけなのですが、それが認められていなかった。しかし、それが横須賀の浄楽寺像の発見で、同じようにこういう深い衣文線を持って、しかも奥行きのある丸々と太った体、これが鎌倉初めの運慶の肉体であるとわかったわけですね。

顔つきが違うということに、あるいはお気づきの方もいるかもしれませんが。願成就院阿弥陀如来像は、あとから目の周りが全部直されてしまっているのです。そのことはわりあい最近確かめられたことです。

ともあれ、運慶は鎌倉初期にこんな太った体を造りました。平安後期の仏像は痩せていたのですが、平安の終わり、鎌倉の初めにかけてまた運慶によって太った仏像があらわれたのです。太った体ですから、着ている衣にこんな深く激しい衣文線があらわせるわけですね。

### 運慶研究の進展

こうして運慶に関して非常に大きなことがわかりました。この結果として、昭和四〇年代、一九六〇年代といつてもいいでしょうか、この時期に運慶作品に関する研究が著しく進みました。

いままで文献だけでいわれていた作品、例えば、高野山金剛峯寺こんこうぶじの八大童子像。これはすばらしい作品で、早くに国宝に指定されていましたが、江戸時代の史料に建久八年（一一九七）の運慶作品といわれていたのを認める人も、認めない人もいました。しかし、この頃進んできたX線写真を撮る調査、これで像の中に納入品が確認されているのです。八大童子の六体はたいへんすばらしいものです。八

大童子といえますから、もう二体あるのですが、この二体は少し下った時代に補われたものです。当初の六体すべてに、月輪形の銘札、つまり一九五九年に確認された浄楽寺の仏像と同じ形の銘札が確認されたわけです。X線というのは残念ながら、中の文字まではみることができませんから、文字があるのかどうかや何が書いてあるかはわかりませんが、ほんとうは木札というべきかもしれません。ただ、いえることは、あくまでこの月輪、この丸いものが仏像の魂です。その魂に、尊いものですから、蓮の花、蓮華をここに添えている。つまり、この下の板の部分というのは、ほんとうは単なる棒でもいい。それをこういう幅広い板にしてあるというのは、なぜか。そこに文字を書きたいから。それに他なりませんね。だから、ここに銘文はあるでしょう。そしてその中に、運慶の名前が出てくることは、まず誤りないだろうと思います。

それから、京都の六波羅蜜寺はろみつらみの地藏菩薩像。江戸時代の京都の地誌『山州名跡志』に運慶・湛慶たんけいの合作とことが出てきます。これも、作風から考えて、まず運慶に誤りないだろうと。つまり、こんな堂々とした体もないだろうし、こんなみごとな顔もないだろうし、ましてやこの太った体に、激しい水が流れるような、あるいは気流が渦巻くような衣文線の表現も、まず運慶以外にないだろうと。そ

ういわれるようになったのです。

つまり、横須賀の浄楽寺の発見以来、急速に運慶作品は増えたわけです。増えたというより、確かな運慶のイメージが固まってきたのです。昔は南大門の二王と、北円堂の運慶作品だけで、そこに円成寺が加わりましたけれども、それは一番早い、一番若い作品でした。そこに東国の作品が加わって、運慶というイメージが固まってきた。それが昭和四〇年代であると、いってよろしいかと思えます。わたしが、東京芸術大学に入ったのが一九七三年（昭和四八）ですから、研究がここまで進んできた頃に、わたしは芸大にはいったわけです。先ほどわたしをご紹介いただいた安達啓子先生はわたしの大先輩で、わたしが芸大にはいった頃、研究室の助手をしていらっしやいました。その頃は、よく仏像の調査もされていたようですから、きっとその頃は、わたしよりもたくさん、運慶に出会っておられたことだろうと思います。

#### 運慶にであう（二） 円成寺大日如来像

そしてようやく、わたしが運慶に出会う番です。わたしがおりました芸大の芸術学科では二年生で、京都奈良の古美術研究旅行に二週間行くカリキュラムがありました。たいへんぜいたくな日程で旅行しているわりには、飲んでば

っかりいて、昼間はぐったりしているのですけれども、そのぐったりしている旅の中で、唯一目覚める思いがしたのは、奈良の郊外の円成寺へ、バスで行ったときでした。一九七四年の十月です。それで先ほどの、大正十年に銘文が見つかつた運慶の大日如来像に出会うのです。

出会うと申しますのは、わたしはその頃までは別に仏像に興味がなかつたのです。大学では美術史をやる学科に入りましたけれども、絵や何かを書いておりましたから、勉強するのもおそらく、絵画のことをやるのではないかと思つていたので。でも、この作品に出会つて、仏像に目覚めたわけですね。何に目覚めたのか？ そのとき、十分に自分自身で言葉にできたわけではありません。最近こういつた機会に、何かもう、そのときにわかつていたかのようなことをいいますけれども、言葉にできたのは、わりあい最近のことです。仏像というものが人間の形をしている、人体を表している。仏像というのは人体彫刻であると。そういう、あたりまえのことに気づいたので。

特にその側面観です。この大日如来像は現在が多宝塔という新しい塔に納まつていて、一般の方は正面からしか拝めないのですが、わたしが初めて行った頃は本堂の隅に置いてあって、側面をみる事ができました。背中から腰にかけて、そして胸の前で腕を組んでいる手、この姿がとに

かくすばらしいものだ、感動した覚えがあります。

横顔「図5」もすばらしいと思ひました。何がすばらしいのか？ 最近、大学の授業や何かで学生さん相手にお話しするのは、とにかく頭があると、額があつて鼻があつて、口があつて唇があつて、顎があると。顎からのどに続いていく。そういうことです。当たり前の形が、当たり前のようにつくつてあるわけですね。非常に自然な、人間の額や鼻や口や顎がつくられている。しかし、自然な、写実的な表現であるけれども、それをたいへん美しく、まとめあげているのですね。それがまさに、こういう写実的な美術の造形力であろうと思ひます。この髪の毛、結びあげている髪筋ですが、なかなかこれほど美しく、髪筋を自然にしかも美しく、彫りあげることのできる作家はいないと思ひます。これは、他の作家には申しわけないのですが、



図5

他の作家の同じ横顔と比べてみれば、運慶が若くして持つていた力量は明らかに異なります。とにかく、すご

い人がいるものだと、ただただ圧倒されました。それで、仏像の勉強をしようと決めたのです。わたしの一生が決まりました。

### 運慶に近づけない

ところが運慶には出会えたものの、なかなか近づけはしませんでした。円成寺像で古美術研究旅行のレポートを書いて、それからさらに発展させて卒業論文を書こうと思っていたのですが、全然発展しないで、研究旅行のレポートに、少し毛を生やしたような格好で卒論をしあげたのですね。その後も、運慶にはなかなか近づけません。

ところが仏像の勉強をするようになって、これは、日本で日本の美術を勉強している特典かもしれません、たまにわたしがついた水野敬三郎という先生が、第一線で活動されている先生で、いっしょに仏像を調査する機会がたくさんあったのです。その中でわたしたちは仏像を実際に手に持って、あるときにはひっくり返して、あるときには運んで調べます。運慶には近づけないけれども、仏像には、自分がこうやって勉強すれば、触ることができ、近づけることができる、そういうふうには思ったのは確かです。

そんな中で、大学院に進んで勉強している頃、一九七九年ですが、水野先生のもとに、愛知県の岡崎から運慶

作品が発見されたと、そういう知らせがはいったのです。これには文献資料がありまして、正治三年（一一二〇）に滝山寺たきさんじというお寺のお坊さんの寛伝かんでんという人が源頼朝の三回忌に運慶に造らせた仏像が現存していることが確認されました。おそらく明治頃に塗られた表面の色が発見を妨げてきましたが、その後の研究から考えて、これらが運慶作品であるのは誤りない。これを指導教授の水野先生といっしょに調べることができたわけですが、まだ運慶作品というのがみつかるといえるのは、感動でした。

なお運慶に仏像を作らせた寛伝は頼朝と深い関係があります。頼朝という人は、お母さんが熱田神宮あつたじんぐうの出なのですが、この熱田神宮から滝山寺にお坊さんを出していたのです。つまり熱田神宮で男の子が生まれると、滝山寺のお坊さんになるか、熱田神宮を継ぐかどちらか、そういう決まりです。滝山寺に入った寛伝は頼朝の母親の兄弟の息子、つまり頼朝の従兄弟にあたります。それで頼朝のことを慕って、仏像を造ったわけです。それから寛伝の姉妹には足利氏に嫁いだ人がいるのですが、その人の息子足利義兼は北条時政の娘で、頼朝の妻の北条政子の妹をもらっています。こんなわけで、頼朝とは姻戚関係もあるという、たいへん密接な関係です。この関係はあとでまた問題にします。

その頃わたし自身は運慶から少し離れて、運慶よりも、運慶の孫とかひ孫ぐらいの世代、鎌倉の終わり頃の彫刻史の勉強をして修士論文を書いていましたが、その後さらに博士課程に進み、その頃はまだそのあたりを勉強する人もあまりいなかったものですから、その研究が評価されて、さいわいに東京国立博物館に就職できたわけです。

### 運慶にてあう(二) 光得寺大日如来像

博物館に勤めて五年後、一九八六年に、たまたまその頃群馬県立女子大学というところの学生がわたしのところに卒業論文の相談に来ました。当時群馬県立女子大学の助教授をしておられた佐野みどり先生(現学習院大学教授)のご紹介でした。この学生は栃木県の足利に住んで、群馬県立女子大に通っていたのですが、自分の地元にある仏像に非常に関心があるとのことでした。その像は、足利氏ゆかりの像で、足利の榊崎八幡宮かほざきはちまんぐうという神社に伝わったのですが、明治初めの神仏分離で、光得寺こうとくじというお寺に移った仏像であるとのことでした。足利はもちろん室町幕府をつくった足利尊氏の本貫の地ですが、わたしは行ったことがなかったものですから、まあ行ってみようと気軽な気持ちで足利へ出かけたのでした。

それでこの光得寺の仏像を調べたのです。この厨子の大

さが八〇cmちょっと、仏像は三〇cmぐらいの小さな像です。この厨子の中から取り出して仏像をみて、まさに衝撃を覚えました。こういう姿で、非常に円成寺の大日如来像に似ている、しかし、この丸々とした顔とか、体つきやなんかは、浄楽寺とかいった東のほうに残っている運慶作品に似ている。早い話、これは運慶じゃないだろうかと思っただけですね。しかも、すわっている像でありながらここが密閉されている、つまりこれは底を削り残しているのですね。こういう構造は、先ほどの横須賀の浄楽寺の阿弥陀三尊像の中尊、阿弥陀如来像にみられる運慶特有の技法です。しかもきれいに金箔が残っていて、まだ解体修理を受けた痕跡がない、つまり中に何かがいっている可能性があるかと思っただけですね。

それで、その年、最初に調べたのは十月でしたが、暮れにX線撮影に行きました。たまたま母校の芸大に田口榮一先生という日本絵画史の先生なのですが、X線撮影にも堪能な方がいらっしゃって、その方を煩わせて写真を撮りました。そうするとみごとに納入品の映像が出ました。

頭の中の白毫びやくごうの水晶の奥には丸い玉、これはおそらく仏舍利でしょう。それから体の中にはこんな具合に五輪塔の形をした木の柱、それから蓮の花びらのついた水晶の玉。こんなものはいっておりました。これは運慶特有の

ものです。それから人間の前歯もはいつていることがわかりました。これはおそらくこの仏像を作らせた人の歯です。まあそれでこの仏像、他にも変わったことがあります。光背の周りにごちゃごちゃ、如来や菩薩の小さな像がついている。それから台座の下には四頭の獅子がいる。こんなことも注目される所でした。まず光背の周りの如来や菩薩、これは記録によると三七体あった、いまは二八体なのですが、頭のとっぺんに塔が一基ある。塔は大日如来像のシンボルです。つまりこれは三十七尊という、密教の金剛界曼荼羅の中心部分の大日如来を始めとする主要な仏像を集めた曼荼羅をあらわしたものだということがわかってきました。それから台座にはたいへんかわいらしい獅子が四頭います。後ろ側にも留める突起がありまして、もともとは獅子が八頭いたことも想像ができます。そうなると、これはたいへん大きな問題が広がってまいりました。

まず、『鏝阿寺樺崎縁起 并 仏事次第』というめんどろな名前の文書がありまして、この文書は足利氏が本貫の地につくった鏝阿寺という今も残っている大きなお寺と、その奥院であった樺崎寺（かばさきでら）というお寺、その縁起を書いたものです。この中に鏝阿寺をひらいたといわれる足利義兼、足利尊氏より五代前の足利氏ですね。これが密教を信仰して、その信仰のあまり三尺七寸の厨子を造って、その中に

金剛界の大日、大日如来ですね、並びに三十七尊の形像を造った、こういう記事が出てまいります。三十七尊を確かにはまわしていることから考えて、いま残っている像というのはいままさにこの文書に出てくる像に該当すると考えられるに至ったわけですね。

それから先ほどもふれましたが、足利義兼は妻との関係でいえば、北条政子の妹をめとっていますから頼朝の義兄弟です。そして母方の関係で頼朝からみれば、なんとかという、名前を忘れましたけれども、従兄弟の子ともみないな、そういう関係（従甥）になるわけですね。頼朝とのこういう密接な関係が足利義兼にはあるから、運慶に仏像を造らせても不思議ではない。それからこの義兼がこの像を造らせたものと考えますと、この人は建久六年（一一九五）に出家をして建久十年（一一九九）に亡くなっている。この間にできたと考えられるわけです。その辺いろいろ論証いたしまして、博物館の紀要にたいへん長い論文を書きました（『足利・光得寺大日如来像と運慶』〔東京国立博物館紀要〕二三（一九八八年））。それが認められてこの大日如来像は運慶作品と考えられるに至ったわけですね。円成寺の大日如来によく似た姿ですが、胸なんかは円成寺よりも張って、胸の前に広い空間をとった、みごとな肉体です。顎が円成寺よりも大きくて、つまり円成寺よりも

だいぶ大人びた顔をしている像なのです。

納入品の関係で申しますと、水晶の玉はおそらく心月輪です。浄楽寺の仏像や高野山の八大童子にはいっている月輪型の板の円盤が玉に発展した、しかも木の板から水晶に発展した、こういう発展過程の中で晩年の興福寺像に近い段階にあるものと考えられました。それから五輪塔ですね。これも願成就院では板であった、それが興福寺では二枚を重ねて、つまり立体的にあらわした。五輪塔も平板から立体へという発展過程をたどるとすれば、やはり光得寺の納入品は、この途中にあるというふうに考えていいでしょう。そうなると、建久五年（一一九四）から建久十年という年代はちょうどいいのではないかという気がしました。それから三十七尊と八頭の獅子ですが、これは何か？京都の東寺講堂には二一体の密教諸尊がありますが、その中心は当然大日如来です。弘法大師空海が構想して造った像があったわけです。残念ながら現在ある像は室町時代中頃の後補像ですが、平安初期にできた創建像はおそらく日本で一番初めにできた大規模な大日如来像ではないかと思えます。それは中世の記録によりますと、「光中三十七尊あり」、光背の中に三十七尊の曼荼羅がある、「ただし大日三昧耶形なり」。三昧耶形さんまいやぎょうというのはシンボル。つまりシンボルというのは大日如来像の場合、塔なのです。つま

り、光得寺像の光背の周りに一致する。そして「座下八獅子」、台座の下には八頭の獅子がいる。つまり光得寺の像の飾り付けは東寺講堂の像と一致するわけです。つまり小さな像ですが、光得寺像というのは東寺講堂像のミニチュアであるということがわかってきた。これは運慶と密教という関係を考える、たいへん大事な問題です。

そしてさらにいえば、もともとあの頭の上の髻もとりが大きな形、これは円成寺の大日如来像も光得寺と同じだったわけですが、この格好の大日如来は運慶作品以外にも、京都の淨瑠璃寺じゆるりじの像、それから、岐阜の横蔵寺よこくらうじの像、こういった同じ形の像が知られます。これは、みんな他の人が運慶をまねたというよりも、みんな一連のグループが東寺講堂の大日如来を意識して造った、いわば東寺講堂型大日である。その中で運慶が一番優れた造形を実現した、そんなふうに見えるわけです。だいぶ運慶の研究が進んだのではないかと思えます。その辺のことを研究出来たものですから、わたしは今日こうやって運慶のお話をする光榮に恵まれているわけです。

### 運慶に近づく

そしてその頃ですね、だいぶ運慶研究が進んできました。特に昭和の終わりから、東大寺南大門の二王、これが

解体修理を受けるという貴重な機会がありました。この解体修理は鎌倉時代の初めに二王像が作られてから最初の解体修理でした。随分マスコミでも話題になったからご存じの方はいらっしやると思います。両方から納入文書が発見され、一体からは銘文も発見されています。最初に解体されたのは、口を閉じた吡形像のほうです。その後、これが終わってから口を開けた阿形像の解体が始まりました。

まず吡形像。柱を組み合わせたような構造ですが、一番中心部分の柱の胸の位置、まあこれは胸の位置というのがだいじなところなのですが、この位置に巻物が打ち付けてあった。ぼろぼろに虫に食われながらも、残っていた。たいへんありがたいことでした。奥書がありまして、こんなぐあいに文字が書いてありました。「大仏師定覚湛慶」、先ほどの系図の中にも出てまいりましたが、定覚はおそらく運慶の弟です。それから湛慶は運慶の長男。弟と息子が担当したわけですね。

これでこの頃マスコミはずいぶん騒ぎました。開けてみたら運慶の名前も快慶の名前もないじゃないかと。やっぱり学者っていうのはいかげんなことをいうものだというふうになったわけですね。週刊誌やなんかもずいぶんそういう記事を書いたことを覚えております。この時まだ作家の松本清張が存命なのでですね。『週刊朝日』だったと思

いますが、清張がこの謎の解明に乗り出した、というような記事を読んだ覚えがあります。清張が出した結論がどうであったかわかりませんが、

それから数年後に、阿形像のほうは手に持った持ち物の材木の内側から銘文が出てまいりました。「建仁三年」、これは記録に知られていた製作年と同じです。ここに出てきたのは「大仏師法眼運慶」。法眼は運慶ほうげんの位です。次は梵字のアンに阿弥陀仏と書いてアン安阿弥陀仏。これは快慶のことです。つまり運慶・快慶の名前が出てきたのです。

こういう具合に作者の名前がわかってまいりました。ここで問題になったのは、従来、吡形と阿形では作風が違う、ほとんどの研究者が口を閉じた吡形のほうが運慶風で、口を開けた阿形のほうは快慶風だといっていたことです。ところが結果としては、吡形が定覚・湛慶、阿形が運慶・快慶と名前が出てきた。ここでもまた研究者っていうのは、やっぱりいいかげんなことをいっているのだという話がありました。いろいろ研究を重ねまして、わたし自身は、この両方の担当の上に運慶がいて、全体を統括している。つまりここに出てくる名前は、かなり事務的な意味での担当者であって、運慶は初めて大仕事に参加した長男湛慶、それから弟の定覚を指導する機会が多く、逆に形式上は快慶といっしょに担当した阿形は半ば快慶に任せる。



結果として阿形に快慶の作風が色濃く出て、卍形には運慶の作風が出る、そんなことではないかと、わたしたちはいま解釈しております。研究者によっては別の意見のある人がいるかもしれません。

というわけで話がどんどん進んでまいりますが、次に、やはり古くから運慶作品とわかっていた、興福寺北円堂の無著・世親菩薩像のことを。これは出会ったというより、わたしの個人的な体験です。いまから十五年前ですが、パリ、それから日本国内の各地で興福寺国宝展という展覧会を担当しまして、特にパリにいっしょにまいりまして、まさにいっしょに旅をしたのです。人間でもそうですけれど、いっしょに海外出張なんかしますと、普段しゃべらない人でもしゃべって仲よくなったりする場合がありますのですが、この無著・世親とも二か月毎日つきあって、だいぶ仲よくなりました。二か月間ほぼ一人で滞在したものですから、朝夕かならず会場の温湿度をチェックするのですね、だからかならず会うわけですね。その毎日で二体の造形の理解が非常に進んだ感じがいたします。この二体はもちろんたいへんリアルな彫刻なのですが、リアルであると同時に非常に簡潔な立体による、一種の抽象性もふくんだ彫刻なのです。ちょうど大きな柱があつて、その柱に衣文を大ざっぱに刻んで、その前に二本の腕を巧みに出して空間

をつくる。その結果、単純な立体が微妙な空間を生み出す。そういう感じがいたします。それから二体の表情。その時はパリのグラン・パレ美術館での展示でしたが、この光が非常に計算されている。老齡の無著は顔をうつむけています。まだ若い弟世親はわずかに顔をあげています。その結果、目の中に水晶がありますが、この水晶がわずかに光る無著は非常に深い慈愛を表し、世親は逆にキラキラと光って意志の強さをあらわす。そういう計算がみごとくできていることを、毎日この二体と出会いながら感じておりました。

そういう中で、一部に運慶作品といわれていた東大寺の俊しゅん乗じやう房ぼう重じゆう源げんの肖像彫刻も運慶と考えて誤りないだろうという思いを深くしました。克明な写実をみせながら、実は単純なおむすびのような三角形とこういう頭、これを繋いだ単純な造形感覚、立体感覚。これはもう運慶にしかなしえないものであろうと感じたのです。『運慶にであう』にこの一体を加えているのはそういう思いからです。

### 運慶にであう(三) 真如苑大日如来像

そして、わたしの「運慶にであう」は三度目になります。それが最近話題になった、現在立川の真如苑しんにょえんで持つていらっしやる大日如来像です。二〇〇三年にこの像の旧蔵

者からの手紙で出会ったわけです。ちょうどこの頃というのは、お話があって、博物館から清泉女子大学に移ろうと決めていた時です。もともとせっかちなほうですから早く博物館をやめたくてしょうがなかったのですけれど、そんな時、わたしの机の上に一通の手紙が来たのですね。その手紙にスナップ写真がはいつていました。普通のお宅の襖の前に置いてある大日如来像の写真でした。台の上にちょっと乗っていたのですが、なんでこんな像がこんな所にあるのだろうと思ったわけです。

この写真を見たのが七月二二日でしたが、それから二か月後に、ようやくこの像を見に行くことができました。写真でみてびっくりしておりましたが、本物を見てさらにびっくりしました。お宅にうかがいましたら、床の間にこの像が置いてあるのですね。この像の場合には、わたしはもう光得寺を経験しているわけですから、円成寺の大日如来に似ているというよりも何よりも、なんでこんなに光得寺大日如来にそっくりな像があるのだろうと。大きさは六〇cmちょっとありまして、光得寺像のほぼ倍の大きさです。まあよく似ている。他の像とは違う衣文線なんかも、とにかく光得寺像によく似ていました。ひっくり返すと、同じように上げ底で金箔が残っていて、像内は密閉されている。この像をみてほんとうに驚きましたが、言葉をなく

しているわたしをみて、その像を持っている人はびっくりしていました。その方は、別にこれが運慶と思つて買ったわけではなくて、まあ安かったから買ったのでしょね。それでここに何か金具がついていると。この金具がわたしの本で紹介した光得寺像の金具と同じだと。だからX線を撮るにはどうしたらいいんですかと、そういう手紙をくださったのでした。

ともあれ像内は密閉されていますから、X線を撮ろうと思いました。X線を撮る機会はさいわいにすぐに得られませんでした。わたしがこの像をすごい物だといったことによつて、持つていらした方は家の床の間に置いておくのが怖くなつたらしく、博物館にお預けしたいというので、お預かりしてX線を撮つたのです。予想通り納入品がみつかりました。中央に五輪塔の形をした木の板、これは柱といつてもいいのですが、光得寺像の場合より少し薄いので一応、木の札と呼んでおきます。それを留めるための金属の線が、への字型にあつて、それからやはり蓮の花びらがついた水晶の玉。それから中に舍利が入つた水晶の五輪塔、こんなぐあいです。細かい考証は省略いたしますが、光得寺像と共通していて、しかも光得寺像よりも前の段階の納入品であると考えました。

作風の上でも光得寺像よりも少しさかのぼる感じを持つ

ています。かんとんにいうと、顔つき、体型が浄楽寺阿弥陀三尊像に似ているのです。光得寺のほうが面長で、どこか大人びた顔をしています。現真如苑像はなんか丸い顔をして、ぼつちやりしています。悪くいえばちょっと真如苑の方がぼんやりしていて、光得寺の方が賢そうな感じがあるかもしれません。それから光得寺の方が顎が大きいですね。この顔つきを一一八九年の浄楽寺阿弥陀三尊の脇侍や一二〇一年の滝山寺帝釈天とくらべてみると、現真如苑像は浄楽寺に近い、光得寺像は滝山寺に近いのは明らかだろうと思います。ついでに横顔も。同じようでありながら、まだ顎が引き締まって、小さくどがつている現真如苑。顎がこう下に伸びて大きくなっている光得寺。こういう違いがありますね。つまり、真如苑は一一八九年の浄楽寺に近く、光得寺は一二〇一年の滝山寺に近いです。こういう年代観で、真如苑のほうが古いということがわかります。

そして、光得寺像の研究に使った文書『鏝阿寺樺崎縁起并仏事次第』に下御堂という樺崎寺のお堂が出てまいりますが、ここにはなんと三尺の大きさの皆金色、全部金色の金剛界大日如来像があった、しかもその像は厨子にはいって、その厨子には建久四年（一一九三）の願文があったと書いてある。ここに大日如来像が出てくることは承知していたわけですが、現真如苑像がこれに該当すると考え

るとすべて辻褃が合うのです。光得寺像は義兼が出家してから、つまり建久年間の後半、一一九九年までの像でした。その前段階の像がここにあり、それが残っていたと考えると非常に都合がいい。しかもこの像を旧蔵者に売った古美術商、会ったことがなくてどういう人だか知りませんが、伝え聞くところによると、北関東で手に入れたものであるという話をしていたそうです。とにかく北関東というキーワードがあるということはこれが足利から出た可能性を強めるものです。そんな発見で、わたしはほぼこれに誤りないだろうという想像をして論文に書きました（『新出の大日如来像と運慶』『MUSEUM』五八九）二〇〇四年）。その結果はある程度認められていると考えております。

この像は二〇〇八年にニューヨークでオークションに賭けられて、運慶流出というたいへんな騒ぎになりました。その結果、日本円で十数億という価格で現在の真如苑が手に入れました。それが社会的な話題を呼んだのも記憶に新しいところですよ。

## 二〇〇七年の運慶

その運慶流出騒ぎの一年前、二〇〇七年には世間ではこれとは別の運慶騒ぎが起っています。その年に実はまた運慶作品が確認されたのです。しかも二件も。

まず文治二年の興福寺の仏頭。興福寺の仏頭という通白鳳時代の金銅仏が有名ですが、こちらがもう一つの木造の仏頭です。これは横内さんという現在文化庁文化財部にお勤めの歴史研究者の文献資料の研究の結果、判明したことです。それからほぼ同じ頃、横浜の金沢文庫に預けられていた金沢区の光明院という、ちよど称名寺の手前にある称名寺の塔頭ですね、そこに伝わっていた、もうほんとうにぼろぼろの状態の大威徳明王像。これから納入文書が確認されて、一二一六年、運慶が亡くなる七年前ですか、運慶最晩年ですね、その運慶作品とわかった。こういう運慶作品の新発見というのは一九五九年の浄楽寺の発見からすれば五十年ぶりだということでたいへんなことだったと思います。

興福寺の仏頭はいま興福寺国宝館に展示されています。いま頭しか残っておりませんが、もともと興福寺西金堂の釈迦如来像、その頭部です。西金堂は、聖武天皇の妃、光明皇后がお母さんの菩提を弔ってつくったお堂でありまして、その西金堂の釈迦三尊の中尊ですね。その釈迦三尊に随侍していた八部衆、十大弟子が現在残っています。その八部衆の中に有名な阿修羅がいます。ですから、いまは頭だけですが、もともとは阿修羅が仕えていた像です。これが文献の研究から文治二年の運慶作品とわかりま

した。運慶がこの像をお寺に納めるのが文治二年の正月で、この後、この年の五月に、運慶は伊豆の願成就院の仏像を造り始めるのですね。つまりこのあたりで奈良の仕事を終えて、場合によっては東国へ行った可能性があるのかと思います。この像は実は従来は運慶の作ではなく、系図に出てきた、運慶の自家筋にあたる成朝の作ではないかという意見が強かったのですね。それが文献から運慶とわかった。確かに今までの運慶の概念とは少し違う所がある。その辺は今後研究を深めていく必要があると思います。ところがなかなかこれ難しいものですよ。これが最初から運慶とわかっていれば、わたしたちはここからきつと運慶を考え始めたわけです。そういうふうには、何からわかっていくか、それによって作家のイメージはだいぶ変わっていくのでしよう。

それから大威徳明王像はたいへん小さな、全体の大きさが二一cmほどの像です。ほんとうは腕が六本、足が六本あって、この下に水牛、牛がいるのですが、多くが失われています。しかしそれでもこれだけの物が残ったことはたいへんありがたいことだと思います。像内にはいついた納入文書が開封されて奥書に「建保四年、丙子、十一月廿三日、源氏大弑殿、大日愛染王大威徳三体内、大威徳也」という文字がありました。つまり建保四年（一二一六）十一

月二三日に造った、源氏大式殿のための大日如来、愛染明王、それから大威徳、大威徳明王の三体セツトの内の大威徳であるというのです。源氏大式殿というのは大式局だいつくぼねという名前で『吾妻鏡』に登場する源氏の二代將軍頼家、三代將軍実朝のお世話係をした女性です。幕府の中ではたいへん力を持った女性のようなのです。ここに書いてある「巧造肥中法印運慶」は運慶のことに誤りないのですが、実はこの「巧造」という言葉は歴史上にはないのですね。ほんとうはこの巧の次に、匠という字を書いた「巧匠こうしょう」という言葉があるのですが、おそらくそれをまちがって覚えていて、「巧造」と書いてしまったのでしょう。それから肥中、九州に肥前（佐賀）とか肥後（熊本）はありますが肥中なんてありません。ところが別の史料に、運慶や運慶の息子の湛慶が備中法印運慶とか備中法印湛慶と呼ばれた記録があるのです。これも、この人がおそらく地理に弱いとかかなんというか、多分言葉ではビッチュウというのを知っていたけれども、それをこう書くのだと勝手に思い込んでいたのでしょうね。それで二重の誤りを犯して「巧造肥中法印運慶也」と書いてしまった。突然この運慶という名前の文書があらわれたわけですから、中にはこんな誤りをしてるからこの文書は怪しいという人も、ごく一部いたようです。しかしそれは逆で、偽物の文書ならば逆にこ

んな誤りをするわけがないのですね。こういう誤りがあること、例えば、「丙なんとか」と書きまちがえて、ここに「子」と書き直している。こういった生々しい誤りというのは、逆にこの文書の信憑性を示しているのだと思います。つまり、この運慶は運慶と考えて誤りない。こうして最晩年の運慶作品が加わったわけです。

### 運慶の科学的調査

それから、最近科学的な調査がさらに進んでいます。京都の六波羅蜜寺地藏菩薩像も数年前に東京の博物館にやってきました。X線撮影をいたしました。それで納入品が確認されています。たいへん分厚い像ですのでX線を通しにくいのですが、円筒形をした五輪塔らしき物があり、それから水晶らしき玉がはいついていて、その中にさらに黒い玉が見えます。これは舍利容器のようです。これらが解明されれば、この中にこれが運慶作品であることを示す文字があるかもしれない、あるいは、像の年代がわかる資料があるかもしれない、そんなことがいま期待されているところです。

わたしが世に出した光得寺大日如来像は単なるX線ではなくて、X線コンピュータ断層撮影、いわゆるCTスキャンを撮って、像内と納入品の三次元映像が得られました。その結果、ここにはいつている人間の歯は一旦できあがっ

ていた状態の仏像の右腕を外して、そこから入れたことがわかりました。そうすると、歯がなんらかの事情で後から入れられたことになります。足利義兼が建久十年に亡くなっておりますから、その直前に像がつくられて、そして足利に運ばれ、義兼の遺体から取られた歯が納められた、そう考えたと辻褃が合う。つまり義兼が亡くなった建久十年三月の直前の製作というふうに考えるのがいいだろうということ、わたしはさつきご紹介した『別冊太陽』の中の短い文章に書いておきました。こんなふうに研究がだんだん進んできています。他の像に関しても、いろいろ新しいことがわかってくるだろうと思います。

また運慶にであう？

それでは、そんなふうに運慶に出会ってきたわたしが、また運慶に出会うというか、まだ運慶に出会うというか、そういうことがあるかどうか。だんだんこちらの人生も、いまの講演の時間のように残りがなくなってきましたけれど。いくつかの推定作品が確かめられる可能性もないとはいえません。それからいま、文字だけでわかっている像が世に出る、その可能性もあると思います。わたしはきょうご紹介したように何体か大日如来という種類の仏像に出会っているわけですね。大日如来に出会って勉強を始めて、

大日如来の論文を書いて、運慶作品、運慶の研究者としていまに至っているわけですが、まだ大日如来像があらわれる可能性もあるのではないかと思うのです。

先ほどの横浜で発見された新しい運慶は大日・愛染明王・大威徳明王の三体で造った像でした。この中の大威徳明王があんなふうにはろぼろになりながらも残っていたわけです。この大日如来が出てくる可能性がないとは誰にもいえないと思います。とにかくこれだけ古いものが残っている日本という国は、こういう物を残している可能性はすこぶる大きいといつてよいかと思えます。つまり、わたしがまだ運慶に出会える可能性は非常に大きいだろうと思えます。もちろんわたしより若い方ももっと可能性が大きいのです。

というところで時間になりましたので、終わりにさせていただきます。ありがとうございます。

#### 質疑応答

北田堂の無著と世親は運慶の子どもたちの名前が銘文に出ているわけですね、それを運慶の作だとする根拠というか、それはどうということなんでしょう？

北田堂弥勒仏像の銘文の中には、弟子や子どもたちがみ

んな頭仏師とうぶしを称しています。その頭仏師というのは何かはまだあまりはつきり類例があるわけではありませんけども、おそらく群像全体を統括する大仏師がいて、その中で一体一体を担当する担当者、その程度の意味だと思えます。つまりそこで大仏師と区別している頭仏師という表現は明らかに像全体の姿の決定権、あるいは仕上げの決定権、それを上の人が持っていることをしめすのだと思えます。その意味でそこにいるのは運慶です。したがって、あの優れた表現というのも運慶のものと考えざるを得ないと思います。

そうすると、お顔がすばらしいですけど、あれを彫ったのも運慶であろうと？

いや、あるいは直接鑿のみをとったのは弟子だけであるかもしれません。しかしそれをすべてプロデュースして、指図してあるいは修正を加えたのは運慶であろうと思えます。運慶作というふうに呼んでいるのはそういう意味ですね。

それが運慶作として、世の中で確定されているということですか。

そう考えております。その辺は、同じ美術史のジャンルの中で例えば西洋美術史の先生なんかで、そういうのを作者とは言わないというような議論をふっかけてくる先生がいないわけはありませんが、現在わたしたち日本美術史の中ではいまの運慶の工房、そして何をもって運慶作とするか、それに関してはいまわたしがお話ししたようなことが認められていると思います。

昨年度の横浜市文化財に指定された、龍華寺りゅうけしの大日如来像が確か、慶派の作というふうに聞いているのですが、これが運慶作という可能性はどれくらいあるでしょうか？

可能性はゼロですね。龍華寺りゅうけしというお寺の像ですね。たまたま、このあいだの金沢文庫の〈特別展 運慶〉の後に開催されるのが龍華寺の展覧会でした。それで運慶展の際にも予告のポスターが金沢文庫の中に貼ってありまして、いまおっしゃった昨年横浜市で指定した大日如来像の写真が出ていたのですね。像の作者に対してもそれから龍華寺様に対しても失礼なのですけれども、同じ格好の像をみると、出来不出来というのが良くわかります。〈龍華寺の像はこんなに両手が拳がって脇が甘い、こちらの運慶

の大日如来像はこんなに脇がきちんとしまっただけでしっかりしている」といふ話を運慶展に同行した人に話した覚えがあります。おそらく運慶の子どもの代なんでしょうけども、運慶の子どもとも違って、古い像ではありませんけども、彫刻の才能はあまりなかったのに彫刻家になってしまった、そういう人がつくった像ではないかという感じがしております。